

2019年3月31日

# ニューズレター3月号

～ミッション2030～

## 第5回 福音ワークショップ

### 「一人ひとりの使命を生きる」

日時：2月24日（日）13:00～15:00、 場所：信徒会館ヨセフホール  
参加人数：120名（分かち合いグループ数：22）  
式次第：13:00～13:10 歌（「私をお使いください」）・挨拶・流れの説明  
13:10～13:25 講話（英隆一朗神父）  
13:25～14:05 グループ（4人ずつ）に分かれての分かち合い  
「自分の使命について、今ここから」  
その内容を箇条書きにまとめる  
14:05～14:40 グループから分かち合いの内容を発表  
14:40～15:00 まとめ（英隆一朗神父）  
ウェルカムテーブルから報告  
お知らせ・歌「何も持たずに」

#### 1. 一人ひとりの使命を生きる—講師：英隆一朗神父

今年度のワークショップも最後になり、今まで私たちがどう福音を伝えていくかということ、5回にわたって分かち合ってきたが、最終回はそのまとめになる。言い換えると、私たち一人一人に神様から使命が与えられていて、それを果たしていくということが根本なのではないか。最終回に皆でそれを見つめ直したいと思う。

ミッション2030の4つの柱の中の「福音を伝える」の箇所がどのように書かれているのか、読みたい。

「社会全体の福音化を目指し、どんなところにも（教会・職場・家庭などにおいても）、共同体として、また個人として仕えるところで与えられた使命を果たしていく」とある。社会の福音化を目指すこと、どんなところでも人々に与えられた使命を果たしていくとい

うことなので、今日はそれを特に意識して分かち合いをしていく。

今までの話は、実際的に、どのように、教会に人を導くか、ということだったが、それだけでなく、神様から与えられた使命を私たちがどう果たしていくかということなのである。

簡単にいくつかの例を話したいと思う。

1月から2月にかけて、桐生のクララ会という修道会で自分の黙想をしていたのだが、そこには私の知り合いが一人いる。以前主日の説教でも話したことがあるが、その人は私が若い頃、霊的指導をしていた人で、外国のあるグループの世界的な集まりに行った際、礼拝で神様の声が聞こえたという。「全世界に行って福音を述べ伝えなさい」という神様の声を聞き、それが自分の使命だということを強く、はっきりとそうであると、一つの神秘的体験をして日本に帰ってきた。それで、その後も私の定期的な霊的指導を受け、シスターになって、活動修道会に入り、海外宣教、全世界に行くようになるために、そのような修道会へあちこち行っていた。その間に当然祈りも深めていき、全世界に行って福音を述べ伝えなさいという神様のメッセージを一番自分が果たしていけるのはどこか、と言ったら、それが「クララ会」という観想修道会だった。クララ会という修道会とはとにかく外に一步も出られない。全世界に行って。。と全く矛盾している。私は彼女の初誓願と終生誓願の2回誓願式に行った。誓願式のミサの後のお祝い会はクララ会の前の庭で行われたが、彼女は塀の外へ出られないため、花嫁のいない結婚披露宴みたいで、お客がしゃべっているだけで、お客さんが面会室に行かないと彼女に会えない。そのように厳しいところである。パーティの時ぐらいいいものと思ったが、それすらダメで、みんなの前にすら出てこられないほど厳密な、塀に囲まれたところである。第4誓願は塀から出られないというもので、外に出られるのは、病院、選挙、ゴミ捨てだけ。それだけしか出られない。でも彼女の使命は全世界で福音を伝えることだが、具体的には塀の中での祈りと苦行を捧げる生活を送る。福音を伝える使命というのは考えるよりももっと広いし深いし、ひとりひとり神さまからの呼ばれ方が違うので、それを各々が意識できればいいのではないかと思う。

付け加えると、その修道院は他にも厳しいところがあり、夜は3時間寝て起き、1時間祈り、そしてまた3時間寝る、大変厳しい生活。9月から復活祭までの半年間は大齋で1日1回しか食事をしない。驚くぐらい厳しいところだ。

イエズス会は、自分の身の回りのことが自分一人できなくなったら、ロヨラハウスに行く個人の仕事がかかれてあるカタログス（会員録）というものがあるが、そこにはロヨラハウスに行った人は「教会と社会のために祈りをささげるのが仕事」と書かれている。全く仕事がない人はいない。その中で、教会と社会のために祈り、自分自身の苦しみを捧げる。一人一人自分にとってのクリスチャンとしての使命をどのような形でどう果たしているのか、

それを意識的に果たすことが大事。

例えば、この漫画（配布したマンガミッション）、これを使命と思う人もいる。私財をはたいて作り、無料で大量に配る。皆さんのためではなく、皆さんの子供や孫のために、日本のまだ洗礼を受けていない人たちのためにという使命で作った。若い人向けのものだから、福音を伝えることができる。

そのように直接伝えるという人もいれば、祈りでという人もいる。色々あると思う。だから皆さんの中でも、教会で活躍する人もいれば職場で使命感を持って、あるいは家庭で困難な状況にある家族の世話をするという事で自分の使命を果たしている人もいる。様々なものがあるだろうから、自分の現在の段階に応じてできる。

当教会のある方で、昔からの知り合いの人がいる。その人は、かつては企業のサラリーマンで、すでに定年を迎えた。使命を生きるということでは、大企業の中にいる方が圧倒的に使命感があったという。全くの神なしの世界、お金儲けの世界だが、そこは毎日どうやって生きるかチャレンジだった。教会はみんな信者だから何の問題もない。会社時代の方が使命を生きる歯ごたえ、真剣に祈ることもあった。

使命は人によって違う。それを分かち合って意識してもらえたらいいと思う。

## 2. グループ分かち合いの発表

4人ずつのグループに分かれ「自分の使命について、今ここから」について40分間の分かち合いの後、グループの中で出た意見をいくつかのグループに発表してもらった。（発表順）また各グループでまとめたメモを提出してもらった。

- ①配布されたマンガミッションは以前プロテスタントの方にいただいたことがあり、このようなツールをよく用いているらしいので、使用方法を紹介してもらった。ポスティングや街頭配布より直接友人に渡す方が効果がある。関係が築けていれば捨てずに読んでもらえる可能性が高くなる。また、コリント書にあるように私たち自身が「手紙」となり、遣わされた職場や家庭で読んでもらうのがいいと思う。
- ②今日のグループには様々な才能を神様から頂いている人が集まった。私たちの喜びは日々人に出会う時にその才能を分かち合えることにあり、そこに自分の使命の意義を感じる。
- ③グループ内の各々の使命を述べてもらった。一人は、人の話を聞くのが大好きで、メリエンダで初めて会う人とも話し、教会の中で仲良くしたい。二人目は、お祈りが大好きなので自宅で祈り、頼まれれば人のためにも祈りたい。三人目は洗礼を受けて日が浅いので、まだ何が使命かわからない。最後は、人と話すのが好きなので、入門講座で求道

者の人と話し、宣教に貢献したい。

- ④二人の方の使命を紹介する。目の不自由な方だが、明るく、歩く福音と言われる。存在自体、自分の障害を喜んで、あるがままの自分を生きる、このことに励まされる。もう一人は、修道会の会員、あと1年で終生誓願を受ける。これからの使命は存在すること、奉仕すること、そして次の使命を待っている。
- ⑤ 勉強したことを、周りの人に知ってもらう。未受洗の家族のため受洗を祈る。キリスト者同士の出会いも力をいただける。
- ⑥ 洗礼を受けてすぐには仕事、家庭の事情で教会に来られないこともあるが、状況が落ち着いた時に神に呼ばれる。若い人に教会に来てもらいたい、ミサで隣り合わせになった時など声をかけている。勉強するだけではなく、体を動かす活動、例えば巡礼や黙想もいいのではないか。使命をわかって生きることは難しい。聖書の御言葉を聞き実践する。敵を愛す、をできるようになろう。今日配布されたマンガを地域の方に渡すなど身近なところから福音宣教を実践していきたい。
- ⑦ 7時、12時、6時のミサ、主の祈りを唱え、神への道をよりよく生きたい。イエスの教えから得たものを実践したい。
- ⑧ 福音を押し付けないようにする。福音を自然体で体現できることが大切。
- ⑨ 使命の捉え方が、男性は場所、女性は使命自体を生きるという感性がある。人生に使命があるのではなく、人生そのものが使命である。使命は波である。積み重ねて固くなったところに立っているのも波の結果であり、受け入れる。使命は探すものではなく生きるもの。
- ⑩ 職場はキリスト教母体だが信者は少なく、宗教の話を嫌がられる。時間をゆっくりとかけ、焦ることなく、自然に滲みでるような感じで伝えていくのがいいのではないかと思う。若い人にも役目を負わせてほしい。教会で必要とされないと、若い人は繊細なため、それ以後何もできなくなる。
- ⑪ 震災後、福島での傾聴ボランティアをしている。全てを失った人の心を支えるために自分が遣わされていると実感。熱意をもって続けられるのはクリスチャンだから、と声に出して言える。言葉で言わなくても存在から滲み出てくるキリストの光というものを感じ取られるのではないか、存在イコール人生体験が外に現れていくのではないか。
- ⑫ 命の偉大さに感動し教会に通うようになった。それは身近なキリスト者との良好な関係があり、きっかけになったのではないか。
- ⑬ 最初から宗教の話をするのは敬遠される。まず、人に興味を持ち寄り添うのが大切で、その中で助けたり、小さなことをしていくのが使命なのではないかな、と思う。

### 3. まとめ（英神父）

- ・ポイントが出てきて、毎回思うことだが、豊かな内容が出てきて、味わい尽くせない。
- ・箇条書きにしてまとめを出したいと思う。しかしそれだけではもったいないので、今までの話の積み重ねを冊子のような形にし、ここに集まった人以外にもこの分かち合いを共有できるようなものにして、そこから各々が自分の使命を考え、福音を伝えていける工夫を始められるように。
- ・教会で「福音を伝える」を特別なテーマとして取り上げるのは今年度で終わる。これをスタートとして助け合いながら、どのようにしていけるのかを積み重ねて実りを分かち合えたらいいのではないか。
- ・また、今後もこのような活動に協力してくれる、スタッフ希望者は連絡先を残して欲しい。
- ・教会の宝は人が多いこと。つまりいい人も多い、力を合わせていけたらいいと思う。逆に問題を抱えている人も多い。その人たちも癒され、救われ、恵みを得られるところであればいい。
- ・使命の捉え方。男性は場所で女性は生き方。言い換えると、男性は doing、何か形になることを考える。女性は being。使命を伝えるのは being が基盤で doing がある、つまり、生き方があってどこで何をするか。余談だが、定年前の人の分かち合いで、男性は定年後何するかばかりを考えている。発想を変えたらどうか。doing はなくなるが、being はずっとある。そのような次元で、使命は考えなければならない。
- ・Mission は遣わす、派遣するというラテン語から来ている。神様から遣わされている。Mission をどう生きていくか、神様はどう私を遣わそうとされているのか、振り返り、祈りが必要。なんでもかんでもやっていいわけではない。
- ・使命は Mission の漢訳。意味は、自分の命をどう使うのか。カリスマ、賜物は人それぞれ違うので、自分に与えられたカリスマをどう使うか。与えられている賜物を、自分だけでなく神様にそして人々にとっても喜びになるように使い方を考えるのが良い。
- ・若い人の話が出たが、若い人の「ために」やるのではなく、若い人と「ともに」やるということではないか。例えば教会学校のリーダーの活躍は素晴らしい、責任・場が与えられているというのは大事だと思う。
- ・世界の全イエズス会が 10 年かけて行う 4 つの優先的選択がつぎのように発表された。まだ日本語訳は出ていない：
  1. 識別と“霊操”の推進
  2. 貧しい人びと・排除された人びととともに歩む
  3. 若者ととともに歩む
  4. 私たちがともに住む家・地球とそこにあるものを協力して大切にする
- 10 年間の計画。ミッション 2030 の期間と同じであり、リンクさせられる。また、菊池大司教が東京教区の 10 の課題を発表している。
- ・福音宣教の面で言えば、教皇フランシスコ来日は大変いい機会。来日前から準備をし、

その後フォローアップをする。テレビでも報道されるので、職場で絶対に話題になる。少し勉強しておけば、教皇の情報を伝えながら宣教ができる。絶好のチャンス。30年に一度のこの機会を逃すのはもったいない。

#### 4 ウェルカムテーブルから報告

前々回のワークショップでウェルカムテーブルについて説明。その後何名か活動に参加してくれる人が出てきて一緒に作業を進めている。

ウェルカムテーブルは東京教区でも進めようとしている事業で、2016年に教区のウェルカムテーブルグループが設置された。教会に新しく来られる方々、また既に教会に関係していてもお互いの交流がない、あるいは活動の場がなかった方々がいるので、皆でオープンな教会を作っていきましょうという目的からスタートした。その次の年2017年、イグナチオ教会ではミッション2030という取り組みが発足。活動初年度である2018年には、祈りを深めるグループがスタートを切った。

今年度は福音を伝えるグループが進めてきているが、その一環として4月にイグナチオ教会のウェルカムテーブルを設置する。皆様からのご支援・ご協力、暖かい眼差しで見守っていただきたい。どのようにしたらもっと開かれた教会を作っていけるのか、救いを求めている方々に、クリスチャンとしてどのように向かいあい、声をかけ、接していけばいいのか、私たちは英神父のもとで学んでいるが、そのことを本格的に教会をあげて進めていきたいのが趣旨である。このことは教皇フランシスコの心に近いものである。米国のイエズス会系出版社ロヨラプレスが作成した“All Are Welcome”という冊子の中で、一人ひとりがどういうことをすれば“Welcome”となるのか詳しく解説している。この冊子には2013年の教皇フランシスコの呼びかけが引用されている。「すべての人が歓迎され、受け入れられ、すべての人が命を新たにされる神様の愛と慈しみを感じられる、そんな共同体を作っていくために私には何ができるであろう。そのことを問うて欲しい」と。

このような活動に参加したいと思う人はぜひスタッフに声をかけ、参加していただきたい。ここに集まっている教会に奉仕している多くの方々、力を共に合わせて、このイグナチオ教会がますます栄えて、人々の幸せの場となっていくよう、そんな共同体を築けたらと切に願っている。英神父様始め司祭の皆様方にどうぞよろしく申し上げます、と申し上げたい。

ウェルカムテーブルは、4月14日（日）からスタートし、21日（日）、28日（日）と計3回の主日に前庭の鐘楼近くにテーブルを置き、教会に始めてきた方、教会の中でわか

らないことがある方への声かけ、そこから始めたいと思う。皆様にもご協力いただけると嬉しい。

福音を伝えるワークショップは今回で終わるが、福音を伝える活動は続けていくので、ご協力いただける方は、帰り際に連絡先をお願いします。

#### 5. その他

今回で福音ワークショップは終わりとなる。

以上